



電子計算機技術者はロバート・パーカーの夢を見るか？

■ 葉山 考太郎

銀河系のワイン界に君臨する帝王がいる。アメリカの元弁護士，ロバート・パーカーで，試飲したワインを数行でコメントし，100点法で点数をつける。この点数を「パーカー・ポイント」と呼び，ワインショップの広告や愛好家は「RP92」のように書く。世界中のワインの価格は，この点数で一方向的に決まるのだ。

30年前，ワイン評論家として無名だったパーカーは，世界中の有名な評論家の予想に反し，ボルドーの1982年が偉大なヴィンテージになることや，ブルゴーニュの1983年は問題が多いと書いた。それがピタリと的中したことで一躍，「銀河系で最上の舌を持つ評論家」となる。世界で初めて100点法を採用したことも大成功の要因だ。パーカー以前の評価は，20点満点方式や5つ星方式がほとんど。20点式だと，評点が16点台，17点台に密集する。畳一枚に30人の美女が爪先立ってひしめくようなものだ。パーカーは小中学校で使う100点満点方式を採用し，ワインの差を「写真判定」した。

パーカー・ポイントに対する愛好家の信頼感は絶大で，RP90以上が高品質ワインであるとの暗黙の「線引き」ができた。RP89とRP90の間には，越えられない大きなギャップがある。RP100のいわゆる「完全ワイン」は瞬時に売り切れ，価格が十倍以上高騰する。生産者への影響も異常に大きい。ワイン界で圧倒的に威張っているボルドーの超一流シャトーでさえ，最新ヴィンテージ・ワインの初値をつける時，パーカー・ポイントを見て決める。パーカー

■ 葉山 考太郎
ワインライター

ソフトウェア開発を30年経験後、大学勤務。葉山名義でワイン専門誌に寄稿。主な著書は、『クイズワイン王』『今夜使えるワインの小ネタ（講談社）』、『30分で一生使えるワイン術（ポプラ社）』、『ブルゴーニュワイン大全（白水社）』。



から良い点数をもらうため、パーカー好みのどっしり濃厚なワイン（別称というより蔑称で「黒ワイン」と呼ぶ）を作る生産者も多く、銀河系のワイン産業を一人で牛耳っている。

パーカー・ポイントの内訳は、色が5点、香りが15点、風味と余韻が20点、熟成の可能性が10点。残りの50点はワインであれば無条件にもらえる。パーカーにインタビューした時に、「実質的に50点法ではないか？」と聞いたところ、「半分は、教室で息をしていればもらえる出席点と同じだ」と答えてニヤッと笑った。パーカー・ポイントには、パーカー個人の嗜好を50点満点で採点しただけとの批判と、ワインのレベルを標準化、簡略化したことへの評価が渦巻くが、良くも悪くもこれが「ワインの品質メトリクス」だ。

ワインと対極にある（ように見える）ソフトウェアの品質メトリクスはどうか？ 開発プロジェクトには内部基準（たとえば、累積バグ数をプロットしたゴンペルツ曲線が漸近線に近づいた）はあるが、ユーザに向けた定量的評価は見ない。ワインは、1本380円から150万円までいろいろある。ソフトウェアも品質レベルは多様だ。ユーザに見えるソフトウェアの品質メトリクスがあれば、ユーザも品質に金を払うし、発注側も開発費用や期間を値切ってプロジェクトがデスマーチ化することも少なくなる。ソフトウェア界に「ロバート・パーカー」の出現を望む。

